1. た･づ･な

「今こそ基本に基づく生産を」

日本中央競馬会
馬事部長
朝井　洋

東日本大震災からすでに 1 年余りが過ぎ、依然として多くの問題が山積みされている被災地において、待望の福島競馬が復興を祈念し力強く再開しました。関係者の努力と使命感を称えるとともに、今後もサークルをあげて「競馬ができること」を考え、さらに強く社会に根付く活動を実践していきたいと思います。

さて、馬券売上げの低迷が続く中央競馬ですが、今後の経営が安定的に維持できるよう、JRA では競馬事業全体の抜本的改革に取り組みつつあります。馬事部においても、生産育成業務を含む既存のさまざまな業務の見直しを始めました。これにより、関係者の方々に何らかの影響を与える可能性もありますが、ご理解をいただき、ともにこの難局を乗り越えていきたいと考えています。

軽種馬生産界の現状は、中央、地方競馬の売上げ不振や景気経済の影響を大きく受け、生産牧場数や生産頭数の減少を見るまでもなく、非常に厳しい状況にあります。こうしたなかで生産牧場の経営に携わる方々には、これまで以上に「今こそ、強い馬づくり」を意識した軽種馬生産を徹底していただきたいと切に願うところです。なぜなら、「競馬を盛り上げる上で、強い馬やスターホースによる魅力あるレースは不可欠である」にもかかわらず、地方競馬における競走馬需要減少とともに生産頭数が減少することによって、全体的な競走馬の質の低下が懸念されるからです。また、出走馬や勝ち馬の多くが同じ勝負服よりは、バラエティがあった方が盛り上がるはずです。「多様性」は、あらゆる競争･競技に対する興味を高める重要なファクターです。

元来、軽種馬生産はリスクの高い事業であり、様々なリスクによる経営上の山や谷の影響を分散するためには、生産規模を拡大しスケールメリットを活用することは有効な手段です。そうした側面的な効果への期待もあってか、軽種馬生産構造改革支援事業による牧場のグループ化は一定の成果が得られたと思われます。しかし、事情があって中小規模のまま牧場経営を維持していく場合、ある程度の山や谷を受け入れつつ、確かな技術を効果的に応用し「強い馬づくり」を信念を持って実践していく必要があります。

たとえば、ここ 10 年ほどで実施率が増加した昼夜放牧、とくに心身の適切な発育と発達を促す当歳からの昼夜放牧は是非とも導入する必要があります。そのための放牧地整備や草地管理は当然伴わなければなりません。さらに、適切な栄養補給も重要な条件となります。すなわち、十分な運動と適切な栄養は「強い馬づくり」に欠くことのできない条件です。大手牧場の隆盛は、充実した施設や人材力もさることながら、まさにスケールメリットと高度な飼養管理技術が背景にあることは間違いありません。

しかし、これらの技術を各牧場の実情や環境に合うよう修正して利用するのは、牧場の知識や裁量だけでは困難なことであり、指導者によるアドバイスや技術研修の場を積極的に活用し効率的に取り込む必要があります。幸い、平成 17 年から開始された軽種馬経営高度化指導研修事業は、本年の延長期間を終えたのちも継続される見込みであることから、本事業を牧場レベルでの「今こそ、強い馬づく

り」にこれまで以上に活用していただきたいと思います。実施主体側も、過去の経験を活かし、十分な効果が得られるよう実施方法の検討と指導体制を整備したうえで本事業に臨むつもりであり、適切な時期に説明の場を広く設定したいと考えています。

また、すでにご承知のようにJRA育成牧場においても、生産馬を含めた育成馬や繁殖牝馬を使った調査研究とその成果の普及に取り組んでいます。「強い馬づくり」を目指す生産育成関係者の方々には、成果の積極的な活用をお願いする次第です。これらをより効果的に推進していくうえで、生産、育成に携わる方々と育成牧場職員との意見交換は、調査研究内容の充実や研究テーマの選択に大いに役立ち、そうした機会をできるだけ増やす必要があると思います。どうか気楽に育成牧場までご連絡いただくなりお運びいただき、率直な意見、質問をお寄せいただきたくお願い申し上げます。

「役立つ確かな情報を探し出す知恵とそれを実践する応用力」が、これからの軽種馬生産と育成を支えるキーワードであると思います。私どももこれをサポートしていきたいと考えています。